

水族館における飼育生物の供養について

——新江ノ島水族館を事例として——

Memorial Service for Creatures Bred at Aquariums:
The Case of Enoshima Aquarium

福田麻友子

キーワード：動物供養, 慰霊祭, 慰霊碑, 献花台, 個の認識

This paper aims to discuss the thinking of those who hold memorial services for creatures bred at aquariums. Daisuke Takagi's discussion of "individual recognition" is important in that the focus is the keeper's sorrow for the dead creatures. The results of interviews in aquariums across Japan and participant observation at Enoshima Aquarium in Kanagawa Prefecture investigating memorial services for aquarium-raised creatures held at aquariums clarified that the consciousness of the keepers and visitors to aquariums should be noted. Surveys of aquariums nationwide found that memorial monuments tend to be set up at inconspicuous places, and that memorial services are privately held by the breeders in many cases. On the other hand, a table on which donated flowers are placed tends to be for visitors to the aquariums by requests from visitors. It should be noted that such a memorial action on the part of the visitors is being carried out at the same time as the construction of memorial monuments and the implementation of memorial services. In the case of the memorial service at Enoshima Aquarium, visitors, in addition to staff, could attend the

service. It was found that the memorial service has different roles for the keepers and the visitors. This paper, based on the results of the nationwide survey and the memorial service for creatures bred at Enoshima Aquarium, presents the difference in individual recognition between the keepers and the visitors and the difference in the role played by the act of holding a memorial service.

【目次】

はじめに

I 研究史の整理と問題の所在

1 研究史の整理

2 問題の所在

II 水族館の歴史

1 国内の水族館の歴史

2 水族館に求められる役割の変化

III 水族館での供養の事例

1 全国の水族館の事例

(1) 調査の概要

(2) 全国の水族館の供養の実施状況

(3) 献花台の設置について

2 新江ノ島水族館の事例

(1) 新江ノ島水族館の概要

(2) 新江ノ島水族館の慰霊祭調査の報告

(3) 新江ノ島水族館における献花台について

IV 水族館における供養とは何か

1 飼育員と客、それぞれの慰霊祭と個の認識

2 水族館における供養とは何か

結びにかえて

注

参考文献

はじめに

日本では、様々な事物に対して供養が行われている。針供養や人形供養、草木供養、職祖の供養など、数多くの供養の事例が存在する。近年では、飼っていたペットが死亡した際は、専門の業者に頼んで火葬をしてもらうことが当たり前となってきている。また、動物園内にも供養碑が設置され、そこで慰霊祭を行っている館も少なくない。

筆者は、新江ノ島水族館でアルバイトをしている。イルカなどの哺乳類が死亡した際は献花台が一週間ほど設置されて、そこに来館者が花などを供えている場面は印象的であった。その他にも、新江ノ島水族館では年に一回、生き物の慰霊祭が行われている。このように、水族館でも飼育生物の供養が行われているにもかかわらず、これらの行為に対する研究は供養を考える上での一例として位置づけられている状態である。水族館は、愛称がつく哺乳類より、魚類のような1匹1匹を認識するには難しい生物のほうが多いにもかかわらず、供養が行われている。また、動物園と同様に水族館も、飼育員や客の飼育生物への思いが供養という行為に現れていることが考えられる。これらのことから、水族館での供養に焦点を当てることで、多面的な供養のあり方と、飼育施設における供養の意義について考えることができるのではないだろうか。

本論文では、水族館で死亡した飼育生物の供養の実態を把握し、それらの供養に関わる人々の心意について考察していく。

I 研究史の整理と問題の所在

1 研究史の整理

ここでは民俗学および隣接分野における生き物の供養をめぐる研究史を確

認していきたい。

松崎憲三は、モノ、動植物、ヒトの供養について述べている [松崎 2004]。ペットの供養について松崎は、生前は家族の一員として認識し、供養もするが、家族代々の墓には入れられないなどの点から、人間ではない存在、家族とは違う存在とみなす、潜在的ペット観があるのではないかと述べている [松崎 2004 : 230]。

また、大丸秀士は、広島県内の生き物の慰霊碑を調査する中で、戦後に建てられた慰霊碑は、戦前に比べて団体が建てたものが多いと述べている [大丸 2015]。団体で慰霊碑を建てることで、慰霊祭が毎年行われ、動物慰霊という本来の目的に加え、団体の結束という効果も生んでいたからではないかと考察している。そして、動物の慰霊碑を建てる動機として、動物とどれだけ深く関わるか、動物やその原材料をどれだけ多く使うか、またどれだけ動物の死を意識しているかという点が重要であると述べている [大丸 2015 : 33-35]。

とりわけ本論文の関心と関わる成果が高木大祐の論考であり、漁業での供養や造園業での草木供養に加えて、動物園や水族館で行われている供養祭についてまとめられている [高木 2014]。高木は、水族館で供養を行う理由を検討するにあたって、飼育員の気持ちに注目している。主に、なるべく自然の状態に飼育環境を近づけ、魚にいい環境で過ごしてもらいたいのが、やはり寿命は短くなってしまいうというジレンマと、生きている魚をエサとして使うこともあるため、結果として多くの量の魚を殺さざるを得ないということに対する気持ちである [高木 2014 : 296-300]。また、動物園では、特定の動物を長く飼育するため、個性を飼育員や客が認識することで愛着が生じるので、その動物の死が供養のきっかけになるという [高木 2014 : 304-305]。動物園と水族館の共通の供養のきっかけとして、動物の死に向き合うとき、長生きしてもらうよう環境は整えていても、どこかに「死なせてしまった」という感情が生まれることを挙げている。そして、高木は供養を考える中で重要なキーワードを、供養の対象の「個性」を意識するか否かであるとしている [高木 2014 : 330-334]。

同様に供養を導く意識に言及した鶴飼秀徳は、弔いの心というものは、「人間と対象物との意識的な関係性」が生じたときに、生き物やモノは供養の対象になると述べている [鶴飼 2018 : 272-273]。

長年飼育され、多くの人に愛されてきた動物の供養については、松崎が言及をしている [松崎 2019]。都立井の頭自然文化園で飼育されており、多くの人に愛されてきたゾウの「はな子」についての記述がある。はな子が死亡した後、美術館で写真展が行われたり、吉祥寺の駅前には銅像が建てられたという。また、はな子が飼育されていたゾウ舎はそのまに残されており、様々な写真や年譜表が掲げられているそうである [松崎 2019 : 6-7]。

以上のように、長年にわたり動植物やモノの供養という事象は多く取り上げられてきた。その中でも、供養をする理由として、供養の対象を我々人間がどう捉えているかが重視されてきたといえる。

2 問題の所在

先行研究を検討するかぎり、以下の問題点を指摘することができる。まず、高木は水族館で供養が行われている理由として、本来は川や海など広いところに住むべき生き物を、狭い水槽に閉じ込めてしまっていることへの罪悪感などを挙げていたが、果たしてそれだけの理由なのかは疑問である。

水族館によっては、来館者も参加する供養祭や、海獣類が死亡した際に献花台を設置する館もある。動物園が供養を行う理由として、特定の動物を飼育することで飼育員にも客にも愛着が生まれるからとしていたが、水族館でも献花台を設置することをふまえると、この理由は水族館にも当てはまるのではないか。献花台は、来館者が花や手紙を供えるものであるため、水族館で供養をする理由が、飼育員の生き物への申し訳なさだけからくるとは考えがたい。それこそ動物園の例のように、来館者の展示生物への愛着も、水族館での供養を考える上で大変重要になってくるのではないか。現状、水族館での供養については実態把握をふまえて議論を行なう必要があるといえよう。

また、高木および鶴飼は、供養はその対象に何かしらの思い入れを持つなど、個を認識した時に行われると述べている。サケ供養であれば1匹1匹頭

を棒で殴って殺す、草木供養であれば1本1本選定した木を切ったり枯らしてしまうなどの関わり方が重要であるとしている。この点に、本論文でも留意することにした。

なお、従来の研究では、水族館の飼育生物は、供養という対象で把握されていたが、実際に行われているのは慰霊である¹⁾。しかし、本論文では従来の動植物供養研究をふまえて、主に供養という言葉を使い、事例の場合は慰霊という言葉を使用する。

本論文では、水族館における飼育生物供養の実態を特に献花台の設置に留意しつつ、供養の場や供養を行いたいという気持ちは本当に飼育員だけのものなのかを検討する。そして、このような作業をふまえ、飼育員と客の飼育生物に対する個の認識の違いを明らかにする。

II 水族館の歴史

1 国内の水族館の歴史

本節では、日本の水族館が、現在までどう変化をしてきたのかについてまとめる。

日本には、日本動物園水族館協会（以下 JAZA）というものがある。現在そこに加入している水族館は 57 館である。

JAZA は、平成 27 年（2015）に世界動物園水族館協会（以下 WAZA）から、追い込み漁で捕獲されたイルカを日本の水族館が入手しているとして、入手方法の改善をしなければ除名すると通告された。そして、JAZA 内での会員投票をふまえて、追い込み漁でのイルカの入手をとりやめる決定をした。そのため、この JAZA の決定を機に退会した水族館がある [溝井 2018: 278-279]。

以上の理由により、JAZA 加盟の水族館数は国内水族館の総数ではない。国内の水族館の数は、小さい簡易的な水族館も含め、少なくとも 100 館以上はあるという。

日本で最初の水族館は、明治 15 年（1882）に上野動物園に付属で作られた

観魚室^{うをのぞき}である。観魚室は、壁に水槽が並べられた展示で、ホール内には照明はなく、水槽内に外から自然光が差し込むような作りであったようである。この形式の水族館は第二次世界大戦後までおよそ70年以上受け継がれることとなった [鈴木 2003 : 45-46]。

日本の水族館は、アメリカのショー的な水族館の導入には消極的であったそうである。しかし、日本最初のイルカ専用の水族館である、江ノ島マリランドが昭和32年(1957)にオープンした。江ノ島マリランドでは、イルカやゴンドウクジラなどの小型鯨類を飼い、ジャンプなどのショーを見せていた。このことが、日本の水族館がショー的要素を取り入れることに熱心になるきっかけとなった。また、展示の面においても江ノ島マリランドは生物の生き方を見せるような方法を使った点で画期的であった [鈴木 2003 : 222-225]。

江ノ島マリランドとは違う形で展示に新しい方法を提示したのが、須磨水族館と大分生態水族館であった。須磨水族館では、現代の水族館の王道である、「楽しくてためになる」という両路線を明確にした水族館活動を行った [鈴木 2003 : 227-231]。また、大分生態水族館は、イルカのショーではない方法でエンターテインメント性を持たせ、なおかつ魚を自然に近い状態で見ることのできる人気の水族館であったそうである [鈴木 2003 : 237-242]。

2 水族館に求められる役割の変化

ここまで述べたように、水族館ができた当初は、水中に住んでいる生物の様子が見られることや、イルカなどのショーが見られるということで集客をしていた。しかし、水族館として求められる役割は、水族の展示だけではなく、環境保護や生き物に関する理解、命の大切さを学ぶ場の提供でもある。そして、近年はよりその役割が求められるようになってきている。

鈴木克美と西源二郎は国内の水族館の問題点を指摘し、提言を行っている。現在、国内にある水族館は、珍しい生きものを見せるところとなっているという。そのため、社会通念は、水族館は博物館や社会教育施設とは捉えず、むしろ遊園地の一種とみてきた。ゆえに、水族を飼育している展示空間その

ものとして、どこの水族館も似たりよったりになってしまっているという [鈴木・西 2010: 180-181]。これからは、水族館全体への期待を分散して受け止めるために、方針と個性をはっきりと打ち出して、様々な形を作り出すことがいいのではないかと主張している [鈴木・西 2010: 206]。

また、鈴木と西は、水族館の基本は、生命ある水族をどう扱っていくのか、水族の生命をどう尊重するのかの視点を問われるところに行き着くのではないかとしている。

昨今の水族館で飼育されている生物の寿命は種類によって、あるいは野生環境との相違を埋めるための技術がまだ不十分のときには短命の場合もある。その一方で、水族館の環境に順応できた水族、あるいは水族館の環境が適正であった場合、長生きをする水族も多いという。また、ただ生存しているのではなく、過去の様々な試行錯誤の結果、水槽内で繁殖する水族も近年は増えてきているそうである。

しかし、水族館の資料として水族が生きて展示される限りは、いくら飼育環境や収集・運搬・飼育の取り扱いの技術が向上したとしても、水族はいずれ死を迎えることになる。その生と死を、これからの水族館は、科学的根拠にも道徳的にも十分尊重し、無造作に扱うことのないよう心すべきだとしている。そして、水族館は、自然科学の成果をわざとらしくなく見せることで、知らず知らずのうちに自然理解への仲介の役目を果たしている場所でありたい、としている [鈴木・西 2010: 194-199]。

水族館で死んだ魚は、生ごみとして処分する場合もある。珍しい種類の生物は、ホルマリン漬けなどにして展示をすることもあるが、すべての生物にそのような処理を施せるわけではない。しかし、ただ捨てるだけではなく、なぜ死んでしまったのか原因解明のために解剖することで、水族の飼育を少しでも長く、快適にするために研究を日々行っていることも事実である。また、年に一度慰霊祭などを行っている館もあり、決して水族の死を粗末に扱っているわけではない。水族を人工的な環境で飼育している以上、いくら快適な環境を作ったとしても、死は必ずついてくる。水族館職員だけでなく、水族館に足を運ぶ客も「かわいそう」という気持ちで終わらせるのではなく、

生物の死とどう向き合うのかという点が重要なのではないか。

水族の展示を楽しむだけでなく、自然保護、生物の命の大切さを学ぶ場としての役割を強く求められるようになった水族館は、とりわけ生物の死の扱いはデリケートにならざるを得なくなる。生物の生死が可視化される飼育下で、利用客が生物の死を正しく受け止めるために、飼育員が生物の一生をどのように見せるかが、水族館では重要になってくると考える。また、命の大切さを学ぶことをはじめ、飼育員は生物の死を当たり前として捉えることのないように、また、利用客に関しては、自分の好きだった生物が死んで悲しい気持ちを整理するための場所を、水族館が提供することも新たな役割とされるのではないだろうか。

Ⅲ 水族館での供養の事例

前章では、水族館の歴史についてまとめ、その中で水族館がどのような役割を担うべきかについてまとめた。今後水族館は、生物の展示をするだけでなく、自然の保護や命の大切さを学ぶ場としての役割がより求められていくといえよう。そして、生物の生から死をどのように利用客に理解してもらうかが、今後の水族館の課題の一つであることは、Ⅱ-2で述べたとおりである。

本章では、その答えの一つの手段である飼育生物の供養に焦点を当てる。今現在の全国の水族館における供養の実態、そして筆者が調査地とする新江ノ島水族館での供養の事例をまとめていく。

1 全国の水族館の事例

本節では、全国の水族館に電話やメールで調査した結果をもとに、水族館でなぜ供養を行うのか、供養がどのような役割を担っているのかについて考察していく。

(1) 調査の概要

今回の調査では、調査項目として、①「慰霊祭の有無。あるとしたらどのような形態でいつごろ行っているのか、そしていつから始まったのか。やっていないとすれば、なぜやっていないのか、職員のみが参加するような慰霊の場はあるのか」、②「慰霊碑の有無。あるとすれば利用客から見える場所にあるのか」、③「生物が死んだ際の献花台の有無。設置される期間、また献花された花や写真などがその後どう扱われるのか」の3項目を設定した。

調査方法としては、JAZA に加入している水族館は、JAZA のホームページで、加入していない水族館は、それぞれの都道府県の水族館をホームページで調べ、それぞれに電話やメールで確認を行った。

(2) 全国の水族館の供養の実施状況

令和元年(2019)10月15日から12月20日にかけて、全104館(内JAZA加入52館)にメールないし電話を介して質問調査を行った。回答をいただいたのは79館(内JAZA加入43館)、返答のなかった館が25館、回答拒否をした館が5館である。

表1 慰霊祭の有無と公立私立

区分	館数	慰霊祭有	割合
私立	28	12	42.86%
公立	42	5	11.90%

表2 慰霊碑の有無と公立私立

区分	館数	慰霊碑有	割合
私立	28	12	42.86%
公立	42	10	23.81%

この調査の結果、慰霊祭を行う館が18館、慰霊碑がある館が22館、献花台を設置する館が18館、何も行っていない館が39館であった。以下、この結果をふまえた上で、全国の水族館における供養の実態をまとめ、考察をしていく。

調査から得られたデータをまとめると、公立の水族館では、政教分離の考えから、慰霊祭の実施や慰霊碑の設置率が低いことがわかる（表1・表2）。

例えば、埼玉県立さいたま水族館は、県立のため、政教分離の理由から慰霊祭などは行っていない。また、慰霊碑は、より宗教色の薄い「魚霊碑」と称して、園内に建てられている。以下、さいたま水族館における生物の飼養についてまとめていく。

埼玉県立さいたま水族館は、埼玉県には海がないという事由から、淡水魚を専門にする水族館として昭和58年（1983）に羽生市に開館した。繁殖に関して、日本動物園水族館協会の繁殖賞を2度受賞しているほか、県の主要河川である荒川でヤマメの稚魚放流などの取り組みも行っている。

さいたま水族館には、屋外の池のほとりに、魚の彫刻が施された「魚霊碑」がある。この魚霊碑は昭和58年（1983）の開館から17年経った平成12年（2000）に建てられたものである。開館当時は、昭和52年（1977）に判決が示された津地鎮祭訴訟以来、県や市のレベルでの政教分離を問題とする裁判が次々と起こされていた。そのため、県営の施設であるさいたま水族館は、慰霊のあり方について慎重にならざるを得なかった。外部から見て宗教上の行為であると思われることは避ける必要があったため、他施設における慰霊のあり方について聞きながら、検討を進めた。最終的に出された結論は、魚霊碑を建立する一方で、建立に伴う魂入れや、建立後の慰霊祭を館として行うことは一切せず、慰霊を行うことに関しては、各飼育員の意思に任せるというものであった。それから魚霊碑が建立され、以降飼育員達は自分たちでそれぞれに献花や魚霊碑の清掃など慰霊を行うようになったのである〔高木 2014：296-298〕。

筆者の調査のかぎりでは、現在は課長が彼岸に魚霊碑に線香をあげる程度だという。ただ、生物を飼育している以上、慰霊の気持ちがないわけではないとのことであった。生物を飼育していれば、飼育生物の死に直面することは当たり前であり、むしろ慰霊の気持ちや命を大切にする気持ちを育む場が水族館であるため、政教分離などの理由で慰霊祭ができないことはおかしいのではないかとの考えをお示しいただいた。

今回調査をした中で、ただ水族館で死亡した飼育生物のためだけではなく、水族館のある土地で使用されていた船の文化の持続を願う意味も込めて慰霊碑を建てている館や、昔その土地を開拓した人々の供養も含めた慰霊祭を行う館もあることがわかった。また、詳しくは後述するが、新江ノ島水族館では、慰霊祭には飼育員や客の無病息災を願う意も込められている旨を住職が述べている。

このように、水族館に慰霊祭や供養碑がある理由として、水族館やそこに関わる人の健康や安全、その土地の文化の持続も願っていることが挙げられる。そのため、高木が述べるような、飼育生物への罪悪感のみで水族館の供養を考えることはできないのではないか。さいたま水族館の調査データからもわかるように、目に見えるかたちで慰霊祭を行っていないくても、飼育員は飼育生物に、供養の気持ちを当たり前のように持っている。飼育員に限らず、生物を大切に思い、命の尊さを知る場を設けることが、水族館の役割の一つではないだろうか。

(3) 献花台の設置について

次に献花台についての例をまとめていく。飼育生物が死亡した際に献花台を設置する水族館は79館中18館と割合は少ない。しかし、この18館に共通することとして、それぞれ個別に名前の付いた海獣類や魚類などの生物を飼育しており、それらが死亡した際に献花台を設置するということである。そしてこの献花台は、飼育員のためではなく、普段水族館に足を運んでいる客のために設置されている。

それが分かる事例として、筆者が実際に訪れた仙台うみの杜水族館の献花台の例についてまとめる。仙台うみの杜水族館は、平成27年(2015)7月1日に宮城県仙台市で開館した水族館である。この水族館は、同年5月10日に閉館したマリニピア松島水族館での飼育生物をほぼ引き継いで展示している。水環境をはじめとする自然の再生を見つめ、力強く未来へ向かう東北を示すことにより、訪れる人々が勇気や活力を感じることでできる水族館を目指し、「復興を象徴する水族館」を掲げている。また、日本の海が持つ様々な側面を

魅力的に展示するだけでなく、そこに暮らす人々との関わりも展示に取り入れており、地域活性化への貢献を目指している²⁾。

筆者は、平成 30 年（2018）11 月 9 日に仙台うみの杜水族館を訪問し、調査を実施した。そこで、飼育員に仙台うみの杜水族館での生物の供養についてお話を伺った。

まず、仙台うみの杜水族館は、現時点では、慰霊祭は行ってはいない。今後、近くの幼稚園の園児などを呼んで実施したいという考えはあるが、イルカショースタジアムを会場とするため、イルカショーとの時間の兼ね合いでなかなか実現が難しいのだという。しかし、子供たちに「命の大切さ」を知ってもらうためにも、慰霊祭はぜひ行いたいとおっしゃっていた。

仙台うみの杜水族館でも平成 30 年（2018）にイルカが 1 頭死んだそうである。そのとき、常連の客が自主的に花を持ってきたそうで、急遽献花台を 1 週間ほど設置したらしい。仙台うみの杜水族館は、年間パスポートを持っている人が来館者の中でも多い割合を占めており、常連客が多いという。そのため、イルカが死ぬと、客もイルカの数が増えたことに気づき、花を持ってくるのだそうである。このことから、献花台のような供養は職員ではなく、常連客の行動が影響していることがわかる。常連客が毎日見ているイルカが 1 頭いなくなったという認識をしていることが重要な点であるといえる。

また、献花台の設置がない水族館の中には、客が花などを持ってくれば、受け取るという館と、現在客から人気のある生物や、愛称のついている生物が生きているため、前例がないという館があった。前者に該当する館の中には、その日にだけ遊びに来た客が献花台を見た際に、暗い気持ちになってしまうことがないように考慮して置いていないそうである。しかし、哺乳類が死亡した際は、常連客からの献花の意味で花を受け取ることがあるという。他の水族館では、もらった花や手紙は飼育部で保管する。その際、飼育員が、もらった手紙に対して返事を書くこともあるという。

この調査で全国の水族館に話を伺うと、慰霊祭、慰霊碑、献花台の全てがない館も多くあった。そのような水族館の多くは、魚類のみの展示であったり、海獣類の展示がないところが多かった。

何も行ってない館でも、生物一匹一匹を大切に思っており、その死を無駄にしないためにも、その後解剖や観察をすることで、次の飼育につなげているという丁寧な回答をしていただいた。それに対し、全てがないと回答した上で、これ以上質問しないでほしいという返答の水族館もあったことを付け加えておきたい。また、そのほかにも、生物の死に関わることはデリケートな問題であるため、答えられないという水族館もあった。死に関する話題がデリケートであるのは、水族館に限った話ではないが、特に水族館は、高木や鈴木・西が述べたように、生物の死の数が多い。小さな魚などは生ごみとして処分するなど、仕方がないことであるが、それを公的に述べてしまうと、人間の都合で展示していた生物の扱いとして、動物愛護の観点から批判を受ける可能性がある。そのため、答えを控える水族館や「答えられる範囲内であれば」という水族館が出てくるのではないかと。

しかし、死亡した際に検死解剖をすることで、その後生物を飼育する際に長生きができるように研究を重ねるなど、決して飼育生物を粗末に扱っているわけではないことも事実である。毎年生物が大量死した日に自分たちの技術不足への反省や、死んだ生物の供養のために黙祷をするところや、職員みの慰霊祭を行う水族館も多くある。

処理の方法だけを聞くと生物に対して扱いが冷たいように感じるかもしれないが、さいたま水族館のデータに挙がっていたように、生物を飼育している以上、敬意を持って向き合っていることには変わりはないのである。

また、ここでの作業から注意したいのは、生物を大事に思う気持ちは飼育員のみではなく、水族館に足を運ぶ客も同じであるという点である。すなわち、水族館の供養を理解するうえで、客の感情を考慮する必要がある。自分が気に入っていた生物が死んでしまった際の一つの気持ちの整理方法として、手紙を渡したり、花を渡す行為があるのではないかと。そしてその気持ちに応える水族館側の対応として、献花台の設置や、手紙への返信が行われているのであろう。

このように、飼育員や客の生物に対する気持ちが、それぞれ慰霊祭や献花台というかたちで表れていることが考えられる。これらのことをふまえて、

次節では、新江ノ島水族館において飼育生物の死にどう向き合っているのかについてまとめていく。

2 新江ノ島水族館の事例

(1) 新江ノ島水族館の概要

新江ノ島水族館の歴史は、前身の江の島水族館と江の島マリナランドから始まる。

江の島水族館は、昭和 29 年（1954）7 月 1 日に日本における近代的水族館の第 1 号として開館した。その 3 年後の昭和 32 年（1957）5 月 3 日には江の島マリナランドの営業が開始した。

江の島マリナランドは 3 頭のカマイルカの飼育から始まり、日本で初めてイルカの持つ能力をショーという形にアレンジして紹介することに成功し、開館当初から人気が高かったという。昭和 63 年（1988）8 月 3 日には、日本で初めて飼育下 3 世のバンドウイルカの繁殖や、平成 12 年（2000）6 月 7 日に世界初の飼育下 4 世のイルカの繁殖に成功するなど、生物の繁殖にも力を入れていた。

平成 16 年（2004）1 月 12 日には、新しい水族館の建設のため、江の島水族館は閉館となり、同年 4 月 16 日に現在の新江ノ島水族館が開館した。新江ノ島水族館になってからも世界初の飼育下 5 世のバンドウイルカの誕生のように、生き物の繁殖や、珍しい生き物の展示に力を入れている。またその一方で、水族館に泊まるプログラム「お泊りナイトツアー」など、楽しく遊びながら学べるエデュテインメント³⁾型水族館として、新江ノ島水族館になってから 15 年経った現在でも新しい試みをし、多くの客が足を運ぶ水族館となっている⁴⁾。

(2) 新江ノ島水族館の慰霊祭調査の報告

新江ノ島水族館は、昭和 54 年（1979）に旧江の島水族館の創立 25 周年を記念して、動物慰霊碑が建立された。それを機に、動物愛護週間中に毎年慰霊祭を開催しており、新江ノ島水族館となった今でも継続している。令和元

年（2019）は9月20日に「水の生きものとペットの慰霊祭」が開催されたので、同慰霊祭の参与観察の成果を以下にまとめていく。

会場は、水族館に併設されているなぎさの体験学習館の1階にある、創造発見ラボという部屋である。この部屋で10時から10時30分の間に慰霊祭が行われた。会場内は、前方に献花台、献花台の右側に式次第、左側に前年の慰霊祭後から今回の慰霊祭までに死亡した、水族館と幼稚園で飼育していた生物一覧が準備されている。

そして、参列者が座る席が、前方に水族館関係者、その後ろに近隣の幼稚園2園の園児、その親、一般の参列者の順で用意されていた。服装としては、水族館の関係者は簡易的な喪服だったが、その他の参列者は、私服であった。

式の流れとしては、1. 道場偈、2. 開経偈、3. 読経（自我偈）、4. 献花、5. 焼香、6. 回向、7. 館長挨拶、8. 奉送、であった。

2の開経偈の際に、この慰霊祭が昨年の9月から慰霊祭の日までに死亡した水族館の生物、幼稚園で飼っていた生物、園児たちがそれぞれの家で飼っていたペットの慰霊であること、水族館で働く職員と来館者の健康と安全、そしてトリーター⁵⁾の日々の研究の成果を祈る場であることを述べていた。その後、読経をしつつ、代表で何名かが献花と焼香をした。献花をした人は、新江ノ島水族館の館長2名、藤沢観光協会の関係者、展示と経営の責任者が1名ずつ、それぞれの幼稚園の園児代表が2名ずつであった。

6の回向では、それぞれが愛情を持って育て、この場で供養された生物たちは、新江ノ島水族館の目の前の相模湾を渡り、極楽浄土に行くという旨を述べていた。

7の館長の挨拶では、館長が水族館は展示の裏で新しい命が生まれることがあれば、亡くなる命もあり、その命の尊さやつながりを理解してもらえればと述べていた。また、令和元年（2019）の慰霊祭は、新江ノ島水族館になってから16回目、旧江の島水族館の頃から数えると、41回目になるそうである。

8の奉送で龍口寺の住職と僧侶が退場し次第、園児が一人一人献花をし、その次に一般の参列者が焼香をする、という流れだった。一般の参列者は、い

つも水族館に来ている常連客が5名ほどと、筆者だけであった。一般の人の焼香が終わったら、その場にいたスタッフも焼香をし、あとから式には参加していなかったスタッフも焼香のために会場を訪れるなど、形式的な慰霊祭ではないのだと感じた。

この年に供養された生物は、水族館では、「バンドウイルカ（パーシー、ピック）、オタリア（トトロ）、アオウミガメ、魚類、クラゲ」、幼稚園では「メダカ、ザリガニ」、「メダカ、オタマジャクシ」であった。また、今年の慰霊祭で供養された生物は、水族館では、「バンドウイルカ（ミル）、オキゴンドウ（セーラー）、クラゲ、魚類」、幼稚園は「クジャク（ばくちゃん）、メダカ、カニ」、「メダカ」と書かれていた。平成30年（2018）も令和元年（2019）も、その一覧とは別に、その年死んだイルカやアシカの写真と簡単なプロフィールが書かれているパネルも置いてあった。平成30年（2018）は、ミルとセーラー、令和元年（2019）は、パーシー、ピック、トトロ、アオウミガメがパネルに取り上げられていた。参列していた常連客の中には、焼香をした後に、その写真に向かって礼をする人もいた。

新江ノ島水族館では平成17年（2005）まで魚類などの放流をしていたが、今は行っていない。館員に確認したかぎりでは、少なくとも平成17年（2005）に放流したアカウミガメは、葉山の海岸で孵化後の条件が悪い場所に産卵されていたのを新江ノ島水族館が引き取り、8月に孵化したため、それを供養祭で放流したという。少なくとも平成19年（2007）にはもう行っておらず、以降、今日に至るまで放流は行っていない。その理由としては、アカウミガメなどの場合は、卵を産んだ場所から近いところで卵から孵化し、海に戻る方が良いからであるという。もしこの先卵を引き取るようなことがあれば、以前のように放流をすることもあるかもしれないが、実施する可能性は低いという。

（3）新江ノ島水族館における献花台について

慰霊祭とは別に、新江ノ島水族館では、ショーに出ている、それぞれが命名されているイルカやアシカが死んだ際は、ほぼその翌日から1週間ほど、

献花台が置かれる。そこには、花や手紙、アルバムなどが供えられる。毎回机の上は、供物でいっぱいになる。このお供え物をしているのは、年間パスポートを持っているリピーターである。ここで供えられる花や手紙、アルバムなどは、バックヤードで保管されるそうである。

献花台が置かれるようになったのはいつごろか確認したが、詳細はわからないとの回答を受けた。しかし、それぞれのお気に入りの生物に花などを持ってくる客がいて、それが献花台を置く理由になっているとのことであった。献花台の設置は館主導ではなく、ファンの側の働きかけで発生したと考えて良さそうである。

また、死んだあとの生物は、死因の解明のため場合によっては大学に運ばれるそうである。その後、研究のためにそのまま大学で保管をされる場合もあれば、珍しい生物であれば、標本にして、それを水族館で展示することもあるという。

新江ノ島水族館では、以前ミナミゾウアザラシの「みなぞう」を飼育していた。このみなぞうは、テレビで紹介されたこともあり、当時は新江ノ島水族館で一番人気のある生物であった。平成 17 年（2005）10 月 4 日に死亡したあとは、館をあげてのお別れ会が行われたそうである。現在みなぞうは、剥製が日本大学生物資源科学部博物館で展示されている。死亡してから 15 年経った今でも時折客から、「みなぞう君っていたよね？」などの質問を受けることがある。それほど広く認知され、愛されていた飼育生物であったことがわかる。

慰霊祭や献花台は、ただ生物の慰霊の役割を担うだけでなく、飼育下での生物の寿命の限界の再認識や、命の大切さを学ぶなど、多様な役割を担っていることが分かった。以上をふまえ、次章で水族館における飼育員や客の飼育生物に対する個の認識とは何か、そしてなぜ水族館で供養を行なうのかについて考察する。

IV 水族館における供養とは何か

1 飼育員と客、それぞれの慰霊祭と個の認識

飼育員とリピーターをはじめとした客、招待されている幼稚園児では、慰霊祭の意味が異なってくるのがいえるであろう。

まず、飼育員にとっては、慰霊祭は、1年間で死んだ生物の供養の場であると共に、気持ちを新たに作る場所でもある。新江ノ島水族館の場合、トリーターは、生物が死ぬと、今までの感謝と、自分たちの技術不足を悔やみ申し訳ないと思うとともに、今後の飼育に対する研究に役立たせるという気持ちになるという。また、過去に飼育生物が大量に死んでしまった経験のある水族館では、毎年死亡した日に職員のみで黙祷を行っている。

鈴木と西は、飼育員にとって生物の死は慣れてしまうものであると述べていた。水族館は、動物園に比べて、生物の死に直面する機会が多い。そのため、死に慣れてしまうのであろう。そのような慣れを一度リセットする場が、飼育員にとっての慰霊祭なのではないか。

その申し訳ないという気持ちや、イルカなど自分たちとともに生活してくれた、長生きしてくれたことへの感謝、そして今後少しでも飼育生物が長く生きられるためにも、死因を突き止めるために解剖をすることで、研究材料として利用し技術の向上につなげるという誓いを改めさせてくれた生物、ということが、飼育員にとっての個の認識なのではないだろうか。

また、水族館は、イルカなどの哺乳類よりも、愛称がつくことのない魚類などの方が飼育数としては、圧倒的に多い。しかし、飼育する生物ごとに住みやすい環境などは異なってくる。飼育生物が少しでも長生きするために、飼育環境を整えるという手間が、飼育員の担当生物への愛着が生まれるきっかけになっているのではないか。

さいたま水族館の調査データからもわかるように、生物を飼育している以上、生物の死は必ず直面することであり、供養の気持ちも自然と生まれてくるのである。しかし、事実、公立の水族館は、供養碑、慰霊祭がある館が少ない。

また、運営が県や市でなくても土地が官営のものである場合、水族館の意向だけでは慰霊碑を簡単に設置できない、ということがある。県や市が関わっている水族館では、政教分離の考えと、飼育生物の供養をどう折り合いをつけて実施していくかという点は、水族館の供養を考える上で、重要になってくると考える。

次に、客にとっての慰霊祭、献花台だが、これは死んだ生物に対する気持ちの整理の為の場になっていると考える。特に、毎日、毎週末水族館に通い、イルカショーなどを見る常連客にとって、自分がいつも見ていた生物を1頭失うことは寂しいものだろう。

常連客が飼育生物に対して、愛着を感じるか否かは、ショーやふれあいプログラムの有無が関係していることが考えられる。ショーなどの有無が、献花台の設置にも影響しているのではないだろうか（表3）。

例えば、新江ノ島水族館のイルカショーは、飼育過程で確認された、そのイルカの性格や特徴などを紹介するような内容となっている。そのため、何回もショーを見ている客の中には、どの個体が誰かということを知っており、それぞれお気に入りの個体がいる客もいる。事実、長年新江ノ島水族館で飼育されていたオキゴンドウのセイラーが死亡した際に、それを知った常連客が、涙を堪えながらイルカショーを見ていたことがある。

このような、常連客のお気に入りの生物に対する思いに応えるために、慰霊祭、献花台があるのではないだろうか。特に献花台の場合は、花だけではなく、手紙や自作のアルバムを供える場合がある。献花台にものを供えたり、慰霊祭に参加することで、客はいつも見ていた生物の冥福を祈り、気持ちの

表3 プログラム実施館数と献花台設置館数

プログラム	実施館数	献花台設置館数
なし	21	1
餌やり	26	10
解説	12	8
ふれあい	25	11
ショー	32	15

一区切りをつけることになっていると考える。

また、このような展示生物への愛着が、客にとっての個の認識といえるのではないだろうか。そのため、飼育員の持つ個の認識とは少し違い、いわゆる愛称を持つ生物がその対象となることが多いのではないか。

テレビなどで紹介された飼育生物がいると、その生物を見に来る客も増える。そうすると、その生物に愛着を持つ客が、常連客以外にも生まれてくる。その場合、新江ノ島水族館のミナミゾウアザラシのみなぞうのように、館をあげてのお別れ会が行われるのであろう。

客の個の認識は、ショーなどの有無が大きく関係してくることが考えられるが、メディアで取り上げられるということも、死後その飼育生物がどのように取り扱われるのかを左右する要因になっているのであろう。

最後に幼稚園児にとっての供養祭は、命の大切さを知る機会となる場になっているのではないか。新江ノ島水族館の慰霊祭では、幼稚園で飼育していた生物も一緒に供養している。飼育すること自体も命を扱う責任感を養う役割があるのだろうが、死亡したあとに自分たちの園で飼育していた生物などを含めた慰霊祭に参加することで、一連の命の流れを学ぶきっかけとなっているのではないだろうか。そして、さいたま水族館の方が言うように、命の大切さや慰霊の気持ちをはぐくむ場所としても水族館は機能し得る。その一つのきっかけとして新江ノ島水族館や、八景島シーパラダイス、アクア・トトぎふなどの水族館では、慰霊祭に近隣の幼稚園を招いているのだろう。

2 水族館における供養とは何か

水族館では生物を飼育している以上、死に立ち会う場面は必ず訪れる。また、水族館は魚類の飼育が主であるため、死に立ち会う場面は、動物園よりも多いであろう。

飼育生物ごとに水槽の環境を整えたり、餌を変えることで、長生きする生物が増えてきていることも事実である。飼育生物が長生きできるようになったのは、過去の飼育生物の死を研究してきた結果である。そのような試行錯誤の上に、今日の水族館がある。

しかし、それでも死に直面する機会が多いと、徐々に生物の死に慣れてきてしまうことも、また事実である。当たり前となった生物の死を、もう一度捉え直し、飼育下での限界を再確認する場が、飼育員にとっての慰霊祭の場なのではないか。もちろん、それだけでなく、飼育環境を工夫して育ててきた生物への愛着という点でも供養が行われる。事実、コロナウイルスを含めた感染症対策により、令和2年（2020）の新江ノ島水族館の慰霊祭は、幼稚園や一般客の参列をなくし、職員のみで執り行なった。ここからも、慰霊祭は客が命の大切さを学ぶという役割以上に、飼育員が飼育生物を供養するという意義が強いことが見受けられる。生物の死を改めて受け止め、今後の水族館の発展に繋げていくという決意の場が、慰霊祭なのではないかと考える。

客にとっての水族館における供養は、愛着のあった生物の死を受け止め、気持ちを整理する場であると考えられる。水族館に頻繁に通い、ショーやふれあいイベントなどを通じて、自身のお気に入りの生物ができる。その愛着は、ペットと似ているのではないか。そのため、その生物が死んだ際は、葬式を挙げる代わりに、献花台に花や手紙を供えることで、自身の気持ちに一区切りを付けるのである。

近隣の幼稚園などを招き、その幼稚園で飼育していた生物も一緒に供養することで園児は、生物の生から死を見届けることができる。また、新江ノ島水族館の慰霊祭での館長の挨拶で、「水族館は生まれる命もあれば、亡くなる命もある。その命のつながりや尊さを理解してもらいたい」とおっしゃっていた。これらのことから、水族館は命の大切さを学ぶ場としての役割も求められているため、慰霊祭がその一つの場になっていることがわかる。

このように、一言で水族館の供養といっても、そこには飼育員や客の気持ち、水族館側の葛藤が含まれているといえる。そのため、水族館における飼育生物の供養は、水族館に関わる多様な立場の人々の生物への思いに応えるためであるといえるだろう。また、生物の供養という行為から生物の死を客や園児が受け止め、命の大切さを考えるきっかけにもなっている。少なくとも生物への飼育員の罪悪感だけで、水族の供養を理解することはできないといえる。

結びにかえて

本論文では、水族館の供養の実態をふまえて、供養を行いたいという気持ちが本当に飼育員だけのものなのかに焦点をあてつつ、飼育生物に対する個の認識がどのように発生しているのかを問題としてきた。

全国の水族館に供養の状況を伺っていくうちに、飼育員と客とでは、生物に対する思いが異なること、したがって、慰霊祭に参加する理由や、献花台が設置される理由も異なることがわかった。異なる点はあるが、生物を大切に思い愛着を感じる気持ちは同じである。その気持ちを尊重し、少しでも寄り添いたいという姿勢が水族館で供養を行うことにつながっているのではないだろうか。

また、水族館を公立と私立とに分け、政教分離の考えから、慰霊祭、慰霊碑が公立の水族館には少ないことを分析した。しかし、水族館には、民営であっても土地が県や市のものである場合がある。その際、水族館だけの意向では供養碑は建てられない。今後は、土地の管理も視野に入れた割り振り、公立の水族館が供養碑を建てたり、慰霊祭を行うにあたって、飼育員の供養の気持ちと政教分離の考えとの折り合いをどうつけているのかに着目しつつ、水族館の供養を考えていきたい。

客側の供養についても、献花台を例にあげ考察したが、今後は、メディアに取り上げられ全国的に認知され人気が出た飼育生物のお別れ会などにも焦点を当てていく。

未知のコロナウイルスが猛威を振るっている令和2年(2020)、水族館も自粛期間中は休館をせざるを得ないところが多かった。その中でも、毎日1時間ほど生中継で水槽の様子をYoutubeで配信したり、オンラインで水族館を巡れるようなプログラムを始めたりと、様々な工夫を行っている。

水族館自体は休館をしていますが、飼育員は通常通り仕事をし、その中で生物の死に直面することもあったであろう。令和2年(2020)は、どのように慰霊祭を行うかも、水族館としての一つの課題となっていたらう。

どのような社会情勢であっても、生物の命を大切に思い、死を悼む気持ちを育むのが、水族館の一つの役割ではないか。慰霊祭を行うべき、行っているところは客も参加してもらうべき、献花台は出した方がいいと主張するわけではないが、命の大切さを伝える手段の一つとして、飼育生物の供養はもう少し見直されてもいいのではないかと筆者は考える。水族館はただのレジャー施設ではなく、様々なかたちで命と触れあう可能性を秘めた施設であると考えたからである。

注

- 1) 「供養」は、仏教的な行為として用いられ、「慰霊」は宗教的な行為か否かに関わらず使用されている場合が多い。
- 2) 仙台うみの杜水族館 HP「水族館コンセプト」<http://www.uminomori.jp/umino/description/> (2020年8月30日最終閲覧)
- 3) エデュケーション (Education: 教育) とエンターテインメント (Entertainment: 娯楽) を組み合わせた合成語である。
- 4) 新江ノ島水族館 HP「歴史」<https://www.enosui.com/history.php> (2020年8月31日最終閲覧)
- 5) 新江ノ島水族館では、生物を飼育 (treat) し、客をおもてなし (treat) する、ということから、飼育員のことを「トリーター」と呼んでいる。

参考文献

鵜飼秀徳

2018 『ペットと葬式—日本人の供養心をさぐる—』朝日新聞出版

鈴木克美

2003 『水族館』法政大学出版局

鈴木克美 西源二郎

2010 『新版 水族館学—水族館の発展に期待をこめて—』東海大学出版会

大丸秀士

2002 『動物慰霊や動物愛護のモニュメントについてのアンケート調査』私家版

2015 「広島県の生き物慰霊碑：分布および建立背景の時代変遷」『東海大学紀要 海洋学部』12巻3号 27-55

高木大祐

2014 『動植物の供養と現世利益の信仰論』慶友社

田口理恵

2012 『魚のとむらい—供養碑から読み解く人と魚のものがたり』東海大学出版会

堀由紀子

1998 『水族館のはなし』岩波書店

松崎憲三

2004 『現代供養論考—ヒト・モノ・動植物の慰霊—』慶友社

2019 「動物園にみる慰霊祭—都立井の頭自然文化園を中心に—」『西郊民俗』第249号 1-7

溝井祐一

2018 『水族館の文化史 ひと・動物・ものがおりなす魔術的世界』勉誠出版

